

うるおいプラス



山地 竜馬

口永良部島の高齢化率は約40%で、全国平均の23.1%（2010年）より高い。それでも数少ない若者が地域の行事や祭事に先頭に立って取り組んでおり、60代の年配の人たちが後方で支えている。地域の活力や団結力が感じられ、「過疎」や「衰退」といった言葉は当てはまらない、と思えるところがある。

その中でも私が「同志」として信頼している男がいる。若者たちのリーダー、久木山栄一さん。私より一つ年上の33歳で、運送会社を営み、口永良部島伝統芸能保存会の会長を務める。見かけも話し方もまさしく「親分」という感じだ。私が企画した体験事業で

真っ先に出てきて、難題を引き受けるのだ。彼が今最も力を入れているのが、サツマイモの栽培だ。「イモで1億円稼ぐ」と宣言している。3年ほど前に設立した口永良部島活性化事業組合の目標は、その名の通り、島の活性化である。その第一弾がイモ。栽

したものの、畑を荒らすシカの柵代や初年度の赤字も影響し、人件費を考慮すると赤字のままだった。今秋は3回目。畑を広げたこともあり、草取りなどの手入れが追いついていない。それでも栄一さんは「絶対にやめるわけにはいかない」と言い、黙々と草を取る。

「イモで1億円稼ぐ」

島を訪れた学生たちも、頼りなげな私とは対照的に、栄一さんの言うことはよく聞いた。学生の主体性を生かそうとしていた私は、彼らの意見をうまく調整できずに困っていた。その様子を見た栄一さんは「おまえたち、明日から俺のところに来い。竜馬、任せろ」。

島の人が困っていると彼は培って屋久島にある焼酎メーカーに販売する。組合には大工や民宿経営、漁師など、若者を中心に十数人が所属している。人口や公共事業が減り、人や物が動かず、仕事が減っている。そのことに危機感を持った人たちが動いた。

初年度は作付けに失敗した。2回目は収穫には成功したものの、畑を荒らすシカの柵代や初年度の赤字も影響し、人件費を考慮すると赤字のままだった。今秋は3回目。畑を広げたこともあり、草取りなどの手入れが追いついていない。それでも栄一さんは「絶対にやめるわけにはいかない」と言い、黙々と草を取る。

私はこの島から逃げようと思えば、いつでも逃げられる。しかし、よそ者だからこそできることもある。やる気のある若者を島に増やしていきたい。立場もやり方も導つが目指す方向は

同じだ。お互い、目の前の仕事で精いっぱいだが、いつかゆくり夢を語り合えたら、と思っている。（鹿児島県・口永良部島在住、一般社団法人「へきこの会」代表理事）



事業組合のサツマイモ畑で仲間と語り合う久木山栄一さん（右端）と山地竜馬さん（左端）